

『蜻蛉日記』下巻の考察

——『多武峰少将物語』と遠度の人物像をめぐって——

大本 隼 平

はじめに

『蜻蛉日記』下巻は、上・中巻と比較して、身辺雑記的や物語的であるとされ、上巻から続く主題の乖離などが指摘されてきた。しかし、昨今では、このような指摘だけでなく、上巻から続く主題と関連させて下巻を考察する論も見られる。『蜻蛉日記』下巻に記述される「養女求婚譚」も、その変化の中で、考察し直されている。『蜻蛉日記』下巻では、天禄三年二月（道綱母推定三十七歳）に兼家の落胤である兼忠女の娘を養女として迎え入れる。その後、兼家の異母弟である遠度が、この養女に求婚し、道綱母は兼家の意向を探りつつ、交渉に応じることになる。

この「養女求婚譚」に関する議論の主な視点は、道綱母と遠度との間に艶なる関係を見出し、それを兼家との間に失

われたものの代償として捉え、上巻から続く主題が、下巻にも見られるというものである。石坂氏（一九九七）は、道綱母と遠度の関係が、求婚者と保護者の立場を越えているものとし、「遠度求婚譚の形成は、道綱母にとって自らの女としての華やぎと幸福な「世の中」への夢想とを取り留めようとする営みだった」と述べる。また、川村氏（一九九八）は、和歌表現の視点から二者の関係を「あらまほしい男女の場」とし、「遠度と自分との世界を、あり得べき情趣の場として表象し、そこに道綱母の探し求めた男・女の場を色濃く投影させた」と述べる。さらに守屋氏（一九九一）は、先の二論も認めながら、「決定的断絶ともいうべき兼家との関係の代償として、あわれにも遠度との交渉を艶なるものとしてゆこうとする同情すべき道綱母を、そしてまた直接的な関係が絶ち切られてもお間接的にも兼家との絆を保持することを願望するみじめなまでに悲しい道綱母を二重に

作者は描き出そうとしている」とする。「養女求婚譚」の中に登場する速度像には、確かにそういった描写を見出すことができる。養女に求婚する速度は、道綱母によって、あたかも風流貴公子のように描かれ、「男女の仲」を演出する。

しかし、これらの先行研究の把握は、日記中の速度の造型をどれほど正確に捉えているだろうか。確かに、速度の風流貴公子的な描写は記事中の随所に確認することができる。

ただし、これらの議論は、主として道綱母と速度という二人の関係性に目を向けて論じたものである。滝沢氏（二〇一五）などは、先の三論を、「養女求婚譚」における主要な論として踏まえた上で、道綱母自身の仲介者としての機能に着目するが、やはり速度という人物に対して、詳細に焦点があてられることはなかった。

本稿はまず、従来指摘されてきた速度の貴公子性について、先行研究を踏まえてもう一度確認する。そしてさらに、別作品である『多武峰少将物語』に登場する速度について、詳細な検討を加える。この作品に登場する速度について考察することで、「養女求婚譚」の速度に対してさらに理解を深めたい。『多武峰少将物語』の速度については既にいくつかが指摘があり、「いやみな人物」や「才子」であるといった視点で述べられている。ただし諸氏は『多武峰少将物語』の速度の造型を正確に把握できていない。そのため、『蜻蛉

日記』の「養女求婚譚」に登場する速度の議論も十分ではなかった。そこで、本稿の後半では、『多武峰少将物語』の速度の人物像や役割について、主人公との同質性という観点に着目して『蜻蛉日記』中の速度像と論じ合わせる。

以下、具体的に一節で『蜻蛉日記』「養女求婚譚」の速度の貴公子性について確認する。二節では、『多武峰少将物語』の速度について言及し、その人物像や役割について論じる。その後、三節と四節では、二つの作品に登場する速度を論じ合わせ、『蜻蛉日記』「養女求婚譚」について再考察していくこととする。

一節 『蜻蛉日記』「養女求婚譚」の速度

この節は、『蜻蛉日記』「養女求婚譚」の速度の貴公子性について、実際の場面を確認する。その後、速度に対する道綱母の対応に着目し、速度の貴公子性を論じる。

右馬頭であった速度は、正月の司召によって、道綱が右馬寮の助になったことがきっかけとなり、養女への求婚を試みる。速度は、いきなり養女に求婚するわけではなく、求婚相手の兄弟姉妹、または侍女など、仲介者を挟んで求婚に及んでいる。『蜻蛉日記』上巻でも、「例の人は、案内するたより、もしはなま女などして、言はすることこそあれ」（九〇

頁)と一般的な求婚作法に対して触れられていたが、遠度の求婚はそういった作法に従ったものである。手順を踏んだ遠度は、その後、道綱母の元へやってくる。

ついたち七八日ほどの昼つかた、「右馬頭おはしたり」と言ふ。「あなかま。ここになしと答へよ。もの言はむとあらむに、まだしきに便なし」など言ふほどに入りて、あらはなる籬の前に立ちやすらふ。例も清げなる人の、練りそしたる着て、なよよかなる直衣、太刀ひき佩き、例のごとなれど、赤色の扇、すこし乱れたるをもてまきぐりて、風はやきほどに、纓吹きあげられつつ立てるさま、①絵にかきたるやうなり。「清らの人あり」とて、奥まりたる女の、裳などうちとけ姿にて出でて見るに、時しもあれ、この風の簾を外へ吹き、内へ吹きまどはせば、簾を頼みたる者ども、われか人かにて、おさへひかへ騒ぐまに、②なにか、あやしの袖口もみな見つらむと思ふに、死ぬばかりいとほし。昨夜、出居のところより夜更けて帰りにて、寝臥したる人を起こすほどに、かかるなりけり。

(三二八〜三二九頁)

①では、遠度のたたずまいを風流貴公子のように描き、感動している。また、侍女たちも「清らの人あり」と遠度を評価しており、その雅な姿は顕著である。②では、侍女たちの見苦しい袖口を遠度が見てしまったらうと推測し、みじ

めな気持ちだと嘆く道綱母が描かれている。遠度の雅に対応しようとしている道綱母が見て取れるだろう。このほかに、求婚に応じられず、つらそうにする遠度に対して、「いとつかしさに」という表現がなされ、冷たく突っぱねることでできない道綱母が描かれる。さらに、その後の場面では、遠度が帰る際、無事に戻つたかどうかと心配する様子も描写される。遠度に対して並々ならぬ感情を抱いているかのような道綱母が見て取れるだろう。

また、風流な遠度に対して対応しようとする道綱母は、他の場面でも描かれている。

うちに音なうて、やや久しければ、助に、『一日かひなうてまかでにしかば、心もとなきになむ』と聞こえたまへ」とて入れたり。「早う」と言へば、ゐざり寄りてあれど、とみにも言はず。うちよりはたまして音なしとばかりありて、おぼつかなく思ふにやあらむとて、いささかしはぶきの気色したるにつけて、「時しもあれ、悪しかりける折にさぶらひあひはべりて」と言ふをはじめにて、思ひはじめけるよりのこと、いと多かり。うちには、ただ、「いとまがまがしきほどなれば、かうのたまふも夢のこちなむする。小さきよりも、世にいふなる鼠生ひのほどにだにあらぬを、いとわりなきことになむ」などやうに答ふ。声いといたうつくろひたなり

と聞けば、われも、いと苦し。

(三三二頁)

傍線部では、声をとりにくく、すましながら語る速度に対応して、道綱母は気後れする。この部分も、速度の雅に対応しようとする道綱母が表現されているだろう。このように求婚譚前半部分では、速度に対して反発はしつつも、速度を風流貴公子のように描き、速度と道綱母との間に新たな世界が構築されつつある。冒頭の兼家来訪の場面は、物語との落差からか、必要以上にひどい書き様であった。『蜻蛉日記』では、物事を悪く、誇張して描く傾向が見てとれ、それはこの日記の趣旨でもある「世の中にいとものはかなく」という自分の身の上を綴るといふ序文にも添っている。しかし、速度のたまたまは必要以上に麗しく描かれており、異質とも捉えることができる。先に引用した川村氏の指摘通り、道綱母にとつての「あらまほしい男女の場」が演出されているだろう。

さらに、速度に対する道綱母の対応について考察したい。

「よしよし、かう昼夜まあり来ては、いとどはるかになりなむ」とて、入らで、とばかり助と物語して、立ちて、硯、紙と乞ひたり。出だしたれば、書きて、おしひねり入りていぬ。見れば、

「ちぎりおきし四月はいかにほととぎすわがみの
うきかけはなれつつ

いかにしはべらまし。屈しいたくこそ。暮にを」と書いたり。手もいと恥づかしげなりや。返りごと、やがて追ひて書く。

なほしのべ花たちばなの枝やなきあふひすぎぬる

四月なれども

(三三四～三三五頁)

この場面は結婚延期に対して速度が「いとどはるか」と怒つて道綱母に歌を示す。それに対して道綱母は「なほしのべ」の返歌を送り、もう少し辛抱してほしいと慌てているようである。速度を引き留めるがごとく和歌のやり取りが行われているのだ。さらにこの後の場面でも、道綱母が速度に対して躍起になる。

出づるに、松明など言はずれど、「さらに取らせでなむ」と聞くに、いとほしくなりて、まだつとめて、「いとあやにくに、松明とものたまはせで帰らせたまふめりしは、たひらかにやと聞こえさせになむ。

ほととぎすまたとふべくも語らばでかへる山路の
こぐらかりけむ

こそいとほしう」と書きてものしたり。さしおきてくれば、かれより、

「とふ声はいつとなけれどほととぎすあけてくやし
きものをこそ思へ

と、いたうかしこまりたまはりぬ」とのみあり。

(三二六～三二七頁)

松明を受け取らなかつた速度に道綱母はすぐに文を送る。ここで重要なのは道綱母から手紙を送っているということである。男女間の贈答における「女からの贈答」は「女の積極的な働きが看取され、女のあせり、嘆き、訴え、渴きなどの強調がうかがわれる」と、鈴木氏（一九七六）が指摘したように、特別な意味を持つと考えることができる。養女の母と求婚者という少し異なる立場ではあるが、その関係性は多少見出すことが可能であろう。速度との関係性を破綻させまいという道綱母の緊張した精神状態が見て取れる。

このように、道綱母は兼家との間に失われた関係性を、養女への求婚者である速度に見出し、あたかも風流貴公子のように演出したのである。道綱母の追い求めた「男女の仲」がこの求婚譚には表現されているのであり、そこには、上・中巻から続く「兼家への執着」をも見出すことができる。それでは、速度は単なる風流貴公子として理解するだけで良いのだろうか。速度という人物についてさらに詳細に検討を加えていきたい。

二節 『多武峰少将物語』の速度

この二節では、まず『多武峰少将物語』の概要について整

理する。次に速度登場場面を取り上げる。そして、そこに描かれる人物像や役割について先行研究を踏まえつつ、主人公との同質性という点に着目し、論じていく。

『多武峰少将物語』は、平安中期の仮名文学作品であり、「高光日記」とも呼ばれる。藤原師輔の八男であつた高光が、応和元年（九六一）二月、比叡の横川で出家したことを背景に、彼の出家前後から翌年八月に多武峰に移る以前までを記す。高光出家によつて取り残された高光の妹愛宮や高光妻などを中心に周囲の悲嘆が描かれる。この藤原高光は、醍醐天皇の皇女雅子内親王を母親とし、当時の権門藤原師輔の息子として将来を期待されていた。しかし、父師輔が死亡した後、急遽出家に至るのである。この高光出家の理由について、松原氏（一九九一）は『奥義抄』の歌に注目し、考察する。

高光少将歌云、

「たのむよか月のねずみのさわぐまのくさばにかゝるつゆのいのちを 此歌は古歌なり」

草のねに露のいのちのかゝるまを月のねずみのさわぐなるかな

この二首に対して『俊頼髓脳』では、「これは世のはかなきたとひにて、経文にある事とぞうけ給はる」として、次のように述べる。

たとへば、人ありて、はるかなる荒野をゆくに、虎といふけだもの、にはかに来たりて、その人を食はむとするにげて走る程に、野の中に、古き井のやうなる穴に走りいりて、穴のなからばかりにある草をひかへて見れば、穴の底に、わにといへるものの、大きな口をあきて、落入らば食はむと思ひて待つ。目のおほきなる事、金椀のごとし。歯の白く長きこと、つるぎのごとし。落入りつる上を見れば、追ひつる虎、また、口をあきて、はひのぼらば食はむと思ひて、にらみ立てり。まなこ白く、歯の長きこと、底にあるわにのごとし。その、たのみてひかへたる草のねを、白きねずみと、黒きねずみと、二つして、かはるがはるつみ切る。つひに切れては、落入りて、底に待ちをるわにに食はれなむとす。落入らぬさきに、かきあがらむとすれば、上に立てる虎、はまむとして立てり。これすなはち、この世の中のたとひなり。底にあるわには、我がつひのすみかの地獄なり。上に追ひいれつる虎は、この世にてつくりあつむる業障煩惱なり。たちかはりつつ、草の根をつみ切るねずみは、月日の過ぎゆくなり。白きねずみは日なり。黒きねずみは月なり。月日のゆくさまなむ、かのねずみの、草の根をつみ切るがやうに、程もなきといへるたとひなり。これらをも、心あらむ人は、世のはかなき事をば、思ひ

しるべきなり。

(二〇四〜二〇五頁)

『俊頼髓腦』の本文を要約すると以下のようになる。

一人の人が荒野を辿って行くと、虎に襲われ、古井戸のうな穴に逃げ込む。逃げ込んだ穴の中間にあった草を掴み、下を見ると、そこには鱧が下に落ちてきた自分を食おうと待ち構えている。目は金の椀のようで、歯は諸刃の剣のようであった。穴の上を見ると、虎が口を開けてにらんでいる。

その上、掴んでいる草の根を白黒二匹の鼠が交互に来ては噛み切っている。このままでは、間もなく草の根が噛み切られ、下にいる鱧に食われるであろうし、這い上がるうとする、虎が待ち構えている。『俊頼髓腦』は、この状態こそが「世の中のたとひ」とし、鱧は最後に行き着く「地獄」、虎はこの世で犯した「業障煩惱」、二匹の鼠は「過ぎ行く月日」を示しており、松原氏の指摘がある通り、「絶体絶命の境地に立たされた人間の姿」がここに例えられている。

高光は早くより母を失い、母代わりの康子内親王をも失った。そのうえ、父親である師輔も逝去する。そんな高光にとつて厳しい政治権力戦争に参加することは、状況的にも、精神的にも困難であった。

さらに、『多武峰少将物語』序文には、高光が師輔生前時から出家願望を抱いていたことが書かれる。

本より、かかる御心ありけれど、父大臣、おはしけるほ

どは、制しきこえ給ひければ、え申し立たざりけれど、失せ給ひて後、腹々の君たちは、皆ころとおはしませば、大臣おはしませぬども、ことにものしき事も無し。この齋宮の宮の御腹の女君は、まだともかくもなくて、大臣のかしづき給ひしに、かかりておはせしに、さもあらねば、ただこの御兄人たちを、むつまじきものに語らひきこえ給ひて、世の中のあはれなることを思ししを、見たてまつりたまふを、片時見たてまつらで、えおはしますまじけれど、もとより、かかる御心ありけるうちに、御乳母おはしけれど、それも里住みにて、ことなる事もなくて、よろづのこと、心細くおぼえ給ふままに、ただこのことのみ御心に急がれ給ひつ。 (一六八頁)

傍線部では、師輔生前時から「かかる御心」はあつたけれども、師輔が生きているうちは、出家を禁じられていたので、高光は出家に踏み切ることはなかった、と書かれている。父師輔の逝去によつて、高光は政治的な後ろ盾を失つたうえに、師輔生前時に比べて、出家への弊害が取つ払われたのだろう。その後、高光は兼ねてからの出家を成し遂げ、周囲の人々は悲嘆にくれる。その様子は物語本文中に顕著である。

かくて、あい宮の御もとより聞こえ給ひける。

「なぞもかく生ける世を経て物を思ふ駿河の富士の煙絶えせぬあはれあはれ、そこにも、いかにと

なむ、思ひきこゆる。夢にも、山の君の見え給ふ折は、醒めて、悔しくなむ」と聞こえたてまつらるれば、御返し、

物思ひは我もさこそは駿河なる田子の浦浪立ちやまずして

となむ。

(一七五頁)

特に愛宮の悲嘆は激しいものであった。このように、『多武峰少将物語』では、高光出家に反応を示す周囲の人間の様子が顕著に描かれている。その一人に、先の「養女求婚譚」に登場した藤原速度も含まれているのである。速度は高光の異母兄で、師輔の六男であり、『多武峰少将物語』では、六郎君という呼称で登場する。高光の兄弟らが、出家した高光の元へ訪れる場面で、速度は非常に注目を浴びる人物として登場する。

五月一日に、御はらからの君たち、割籠、具しておはしたりけるに、雨の降りたりければ、いしをぎみ、

かかりてふよかかともへどさみだれていとど涙に

水まさりぬる

少納言、

君がすむよかはの水やまさるらむ涙の雨の止むよ

なれば

右衛門佐、

草深き山路を分けてとふ人をあはれと思へど跡ふりにけり

宮権亮、

いづくへも雨のうちより離れなば横川に住めば袖ぞ濡れます

富小路の君たち、破籠しつつ、詣でたまへり。六郎君の聞こえたまふ。「世の中、心うければ、おのれこそ、かしらそらむ、山へ入らむと思うたまへしかど、おどどの君のかくしたまはで失せ給ひにしかば、罪深くなると思う給へて、思はぬ山々にありくこと、今に思ひ侍れど、君の思はずにておはすれば、御弟子にもやなりなましと思ふ給ふる」とのたまへば、禪師の君「弟子まさりにこそあなれ」と聞え給へば、六郎きみ、「弟子まさりとおぼさばこれより深からむ山にこそ入り侍らめ、いづくならむ」とて、六郎君、

都へもさらに帰らじ我がごとく罪深き山いづこなるらん

禪師の君の御返し、

これよりも深き山辺に君入らばあさましからむ山川の水

四郎君、

君をなほうらやましとぞ思ふらむ思はぬ山に心入るめり

七郎君、禪師の君に聞こえ給ふ。

君が住む山路に露やしげるらむ分けくる人の袖の濡れぬる

御かへし、

苔の衣身さへぞ我はそばちぬる君は袖こそ露に濡るなれ

弟、禪師の君、

昔より山水にこそ袖ひつれ君が濡らむ露はものはか
(一九四〜一九六頁)

五月一日という日付が提示された後、高光の兄弟らが、高光の元を訪れる場面である。最初の場面では、伊尹、兼通、兼家、忠君が訪れ、高光を見舞い、悲しみの和歌を詠む。その後、遠量、遠度、遠基ら「富小路の君たち」も来訪し、高光を見舞う。この兄弟らが連れ立って横川まで高光を見舞いに来ている理由は定かではない。「割籠、具して」とある点から、長旅の準備を整えているという門澤氏(二〇二二)の指摘もあり、少しこの部分に関して先行研究に触れたい。ここで注目すべきは「五月一日」という部分であり、やけに具体的な指定である。新田氏(一九八七)は、兄弟たちの横川来訪は、教師輔の三周忌法要に合わせてやってきたとい

う背景を指摘する。そもそも、兄弟全員が揃って五月一日に訪問するということが、理由がありそうなのである。父師輔が天徳四年五月四日に逝去しているという事実もあり、その周忌法要と関わってくるものであるという考察は、もつともな指摘である。さて、法要で兄弟たちが横川に來訪したことは新田氏の言うようであるが、先にも述べた通り、兄弟らの中でも速度はひとときわ目を引く人物として描かれている。

傍線部に着目すると、横川において剃髪し、勤行生活に入っている高光に対して速度はいの一番に意見する。新田氏（一九七八）は、この場面の速度を「一族の誰一人として咎めなかった高光の罪といふものを、自分にことよせて指摘した」とし、速度を才子としている。新田氏が指摘する高光の「罪」とは、父の意向に背くことと推測される。確かに、この速度の発言まで、「父の意志に背く」という指摘をした人物はおらず、速度が初めて言及する。また、速度含む「小路の君たち」の前には、兼家ら「御はらからの君たち」が來訪しており、身分、階級ともにこちらの方が高い。その人物たちを差し置いて、速度が高光の罪について指摘するのである。新田氏が言うように、「才子」という視点を取れないくもない。また、岡氏（一九五四）は、新田氏の「才子」という見方とは逆で、速度を「いやみな」人物として捉えてい

る。速度の指摘に対して、明らかに過度な干渉であり、おべつかな人物と捉える。岡氏はさらに、ここに描かれた速度の人物像が、『蜻蛉日記』にも反映されているとし、兼家に取り入るため、道綱母の養女に求婚し、それが拒絶されると兼通を彼女に媒介した正真正銘「いやみな」人物とも述べている。実際、速度は母系も出世に不利なわけで、当時の状況を鑑みると、そのような手段を取ってもおかしくない。話が逸れたが、高光の元へ訪れた速度に対して、まったく逆の二つの視点から指摘がなされていることは興味深い。この二視点に関しては、どちらも留意するべきであり、早急に片方が正しいとは言い切れない。二つの視点を踏まえつつ、少々異なる方向性で論じていきたい。

そもそも諸氏は重要な点を見落としている。この場面の直後、高光の夢に父師輔が降臨し、高光が仏道を極めるならば、そばで守っていくつもりだという旨を述べ、高光の「罪」が許されたような描写に移る。

かくて、この入道の君、御夢に、大臣の君、出家し給へりし御姿にて、この横川に、おはしまして、泣きて、聞こえ給ひける。「何を憂しとて、かくはなり給ひにしか。尊さは、いと尊けれど、いと悲しくなむ。あはれに、問ひきこえ給へば、それに助かることどもあり。さはあれど、いとくちをしくなむある」などのたまへば、泣く泣く

く聞こえ給ふ。「いとあはれなる住まひし給ひけるを、
天翔りても、訪ねとぶらはむ。かかりとならば、よにお
ち給ふな」とて、

君がすむ横川の水し濁らずは我が亡き魂は常に

見せてむ

御返りごとと、

いとどしく袖ぞひちぬる横川には君が影見ば水も

濁らじ

と聞こえ給ふほどに、やがて覚め給ひぬ。恋ひ、誓ひ給
ひて、御弟の君に語らひきこえ給ひてぞ、泣き給ふ。

(一九六～一九七頁)

速度によって指摘された「罪」であったが、師輔本人が夢
に出て来て、高光が修行を怠らない限りは未永く見守って
いくという意志を告げる。父親の靈魂が「天翔ける」例は松
原氏(二九九一)の指摘通り、『宇津保物語』、『源氏物語』に
も見える。

『うつほ物語』後見のない俊蔭女が仲忠を抱き、故父を恋い
しく思う場面

「わが宿世、逃れざりけるを、天翔りても、いかにかひ
なく見たまふらむ。親のおはせしとき、まづ死なましも
のを」と… (六八頁)

『源氏物語』明石

故院、ただおはしましゝさまながら、立ちたまひて、

「など、かくあやしき所には、ものするぞ」とて、御手
を取りて、引き立てたまふ。「住吉の神の導き給ふま
まに、はや舟出してこの浦を去りね」と、のたまはず。い
と、うれしくて… (二二八～二二九頁)

また、『小右記』正暦四年(九九三)閏一〇月一四日条で
は、『多武峰少将物語』のように、師輔の靈が登場する場面
も見られる。

十四日、戊戌、觀修僧都來云、近曾行東宮更衣右大將濟
時卿女、修法、猛靈忽出來云、我是九条丞相靈、存生之
時、或寄佛事、或付外術、懇切致子孫繁昌之思、其願成
熟、就中小野宮太相國子族可滅亡之願彼時極深、施陰陽
術欲断彼子孫、所期先六十年、其驗已新、今依滅他之思、
受苦極重、拔苦無期、小野宮相國子孫產時、吾必向其所
妨此事、依存生心願、先所期六十年、其遺不幾、彼時外
術今二年許也、其後可難廻此妨術、又此更衣已有懷任氣、
仍所來煩也、爲断他同胤云々、今聞此事覺往古事、雖云
骨肉、可有用心坎、僧都云、忽造大威德尊可奉歸依者、
然者可任天運者也、 (二二八頁)

ここに登場する師輔は恐ろしい怨靈のようにも見えるが、
藤井氏(二〇〇〇)は、守護靈としての性質を読み取ってい
る。その可否はともかく、少なくとも『多武峰少将物語』の

場面では、高光を見守る守護霊の性格を見て取ることでできよう。ここまでの流れは、①高光は元から出家願望を持っていたが、父師輔が生きていた頃は禁止されていた↓②遠度によって父親の意向に背くという「罪」が指摘される↓③その「罪」が許され、父師輔は、高光が道心に専念するならば見守っていくと語る。という構図になっている。この流れを踏まえて、もう一度先の二視点に戻ってみたい。確かに、遠度は、高光の兄という立場から「御弟子にもやなりなまし」と述べている。兄の立場から「弟子になりたい」と述べ、それが「弟子まさりにこそあなれ」と指摘される。この点、少々皮肉が込められているようにも感じ取れ、岡氏が指摘するように、「いやみ」な人物として捉えることができよう。

また、師輔が高光の夢に登場し、出家を認めたことは遠度ら兄弟に情報共有されたはずだろう。桜井氏(二〇二二)はこの点について次のように述べる。

高光は師輔の夢告を自身のみに向けられた秘事とは受け止めず、懈怠さえしなければ、亡父の霊が守護してくれる、という師輔の子らが等しく銘肝すべき遺誠と認識したがゆえに、尋禪にも語り、都の兄弟姉妹にも知らしめようとしたのではなからうか。

確かに直前の場面で、兄である遠度に「罪」を指摘され、それを再確認したはずであるから、父師輔からの秘事を自分

だけのものと受け止めるのは、やや不自然である。父師輔の夢告は、兄弟たちにも伝わったと見るのがもつともだろう。その夢告を知った上で、遠度は出家に至っていないのである。遠度は出家願望を口にしてはいるが、父親の意向に背くので出家まで至ることができなかったと発言する。本当に高光の弟子になりたい、出家をしたいと思ったのならば、その障壁となる「父の諫め」が消えたところで、出家に踏み切ればよい。本意としての発言ではなく、高光に対しての皮肉だったので、出家の障壁が除外された後でも行動に移せなかったという見方もできるが、断定まではできない。従来見落とされてきた父師輔登場の場面を踏まえても、先の二論の優劣をつけることははっきりさせることは難しい。

新田氏と岡氏の遠度論は、彼の人物像にのみ焦点が当てられている。しかし、遠度という人物をより深く理解するためには、それだけでは不十分である。遠度という人物が持つ作中での役割や特性について、ここで新たに見解を示しておきたい。

遠度は、高光の多武峰隠遁のきっかけを作った人物なのである。遠度は、自分自身を「我がごとく罪深き」とし、出家しようにもしきれず、身分も弱いので政治戦争に踏み入ることでもできない中途半端な身を自責する。そして、高光に対して、自分のことにかけて指摘することで、高光の意志を

固めようと試みる。その後、父の夢告で覚悟が決められるという流れになっている。速度は「父の遺志に背く」という「罪」だけでなく、仏道修行に対して、本当の意味で意志を固めることができないという「罪」を自分のことにかけて高光に訴えるのだ。高光は、この速度との問答を皮切りに、「これより深からむ山」である多武峰に隠遁する。速度は、高光の出家意識を確固たるものにするきっかけを作る役割を担っているのだ。

それだけではなく、『多武峰少将物語』中の速度には、主人公高光との同質性を読み取ることができる。先述したように、速度は、中途半端な我が身を高光と重ね合わせて、「罪」を指摘する。他の登場人物が、高光出家への嘆きを語る中で、速度一人だけが、高光の「罪」に、自分を被せながら言及する。これは、主人公高光との同質性を持っていると捉えて良いだろう。さらに、速度は「罪」を指摘するだけでなく、自らの出家願望についても語る。その出家願望も、高光と同じく、世の中の憂いから抱いたものであり、明らかに「出家を悲しむ周辺の人々」ではなく、「出家側」の立場の人間である。『多武峰少将物語』では、速度の他に、妻や師氏も出家願望を口にするが、それらは極めて皮相的に語られる。高光出家によって悲嘆にくれる周辺の人間を描いた物語の中で、速度は異質な立ち回りをする。主人公高光との同質性が意

識されていることは間違いないだろう。

二つの指摘を踏まえつつ、速度の役割についてさらに踏み入ってみたい。速度の発言により、物語が大きく動き、高光と教師輔という、離れていた二人の関係が劇的に接近する。こういったキーマンの役割も彼は担っている。主人公高光との同質性や、物語を大きく動かす役割を持っている速度は、『多武峰少将物語』の中でも異彩を放つ人物なのである。

三節 『蜻蛉日記』と『多武峰少将物語』における速度の役割

以上、『蜻蛉日記』『養女求婚譚』の速度と、『多武峰少将物語』の速度について、見解を示してきたが、この三節と次の四節では、二つの作品に登場する速度を論じ合わせる。

『多武峰少将物語』に描かれる速度像やその役割は、『蜻蛉日記』『養女求婚譚』にも見出すことが可能であろう。両作品の速度の共通性について、既に松原氏（一九九一）が多指摘している。『蜻蛉日記』中の「今は高き峰になむのぼりはべるべき」という速度の発言は、『多武峰少将物語』中の山に入りたいと述べる速度像に近いものであると松原氏は指摘する。この発言から、確かに共通性は認められるが、

人物像や作中での役割といったより大きな観点での共通性が見て取れる。以下、より広い範囲で両作品の速度を論じ合わせていく。

『多武峰少将物語』で、父師輔と高光の関係を修復するキーマンとしての速度も、『蜻蛉日記』『養女求婚譚』に見て取れる。父師輔の意向に背き、出家に至った高光であったが、速度の登場が、父師輔の夢告を受け取るきっかけとなることは二節で確認した。『蜻蛉日記』でも、疎遠となった兼家との関係性が、速度求婚によって、一時的に修復される。その流れを見ておきたい。『蜻蛉日記』下巻において、道綱母が広幡中川へ転居したことを機に、兼家の訪れはさつぱり消える。

山近う河原片かけたるところに、水は心のほしきに入りたれば、いとあはれなる住まひとおぼゆ。二三日になりぬれど、知りげもなし。五六日ばかり、「さりけるを告げざりける」とばかりあり。返りごとに、「さなむとは告げ聞こゆとなむ思ひしかど、便なきところ、はた、かたうおぼえしかばなむ、見たまひなれにしところにて、いまひとたび聞こゆべくは思ひし」など、絶えたるさまにものしつ。「さもこそはあらめ。便なかなればなむ」とて、あとを絶ちたり。

九月になりて、まだしきに格子を上げて見出したれば、

内なるにも外なるにも、川霧立ちわたりて、麓も見えぬ山の見やられたるも、いともの悲しうて、

流れての床と頼みて来しかどもわがながかははあせにけらしも

とぞ言はれける。

(三一六～三一七頁)

この場面で、兼家とのやり取りは極端に少なくなる。道綱母の独詠歌などが中心となり、兼家に対して直接想いを訴える描写はない。しかし、速度の養女求婚を皮切りに兼家と道綱母とのやり取りが復活する。速度の求婚に対して、道綱母は兼家の承諾を得ることができれば求婚に応じると発言する。その後、速度は「やんごとなき許されはなりにたるを」と兼家の許可は既に出ていた旨を述べる。その後も速度は道綱を介して、兼家からの許可が出ていることを何度も訴えかける。

さて、なほここにはいといちはやきこちすれば、思ひかくることもなきを、かれより「かくなむ、『仰せありき』とて責むると聞こえよ」とのみあれば、「いかでさほのたまはするにかあらむ。いとかしかまじければ、見せたてまつりつべくて。御返り」と言ひたれば、「さは思ひしかども、助のいそぎしつるほどにて、いとほるかになむなりにけるを、もし御心かはらずは、八月ばかりにものしたまへかし」とあれば、いとめやすきこちし

て、「かくなむはべめる。いちはやかりける暦は不定なりとは、さればこそ聞こえさせしか」とものしたれば：

(二二三三～二三四頁)

傍線部では、道綱母は速度の「やんごとなき許されはなりにたるを」という執拗な催促を受けて、兼家の真意を確かめるため返事を求める。道綱母の手紙を受けた兼家は、「八月ばかりにもおしたまへかし」と結婚の延期を決定する。これには道綱母も大変安堵したようで、「いとめやすきこちして」とその心情が述べられている。速度が、養女の父兼家に積極的に取り入り、「やんごとなき許され」を得て求婚に臨んだことで、道綱母も兼家の真意を確認せざるを得なくなつた。『多武峰少将物語』中の速度と同じく、二者間の関係を接近させるキーマンとしての役割を読み取ることができさるだろう。

守屋氏はこれを間接的な絆、みじめな道綱母と捉えているが、むしろ速度の言動による関係の修復や再構築と捉えるべきではないだろうか。速度による熱心な働きかけが、兼家と道綱母の二人の関係性に変化をもたらしているのだ。

また、速度の頻繁な来訪により、兼家に対する歎きをもう一度直接送りつける場面も見られる。

かくてなほおなじこと絶えず、殿にもよほしきこえよなど、つねにあれば、返りごとも見せむとて、「かくの

みあるを、ここには答へなむわづらひぬる」とものしたれば、「程はさものしてしを、などかかくはあらむ。八月待つほどは、そこにびびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも聞こえてむかし」などあり。たはぶれと思ふほどに、たびたびかかれれば、あやしう思ひて、「ここにはもよほしきこゆるにはあらず。いとうるさくはべれば、『すべてここにはのたまふまじきことなり』とものしはべるを、なほぞあめれば、見たまへあまりてなむ。さて、なでふことにもはべるかな。

いまさらにかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を

あなまばゆ」とものしけり。

(二四〇～二四一頁)

兼家は、道綱母側で、速度を「びびしうもてなし」ているのだろうと邪推し、それが、「世に言ふ」ことであると述べる。兼家にとつてこの状況は「うめきも聞こえてむかし」のよう、その歎きを訴えてくる。この兼家の訴えは、「たびたびかかれれば」とあるように、一度だけではなかつたようである。道綱母側もこの兼家の訴えに関して、初めのうちは冗談だろうと思っていたが、何度も同じことを言ってくるので、「あやしう」思ったとある。その後、道綱母は「いまさら」の和歌を送り、今度は兼家から顧みられることがなくなつたという自分の嘆きを詠む。広幡中川への転居を皮

切りに、断絶されていた二人の関係性が、速度の養女求婚という事件を機に、一時的に修復されるのだ。速度は物語を大きく動かし、二者間の関係性を保つキーマンとして、その役割を担っている。

四節 速度と貴公子の同質性

本稿の一節では、『蜻蛉日記』「養女求婚譚」に登場する速度が物語貴公子のように描かれていることについて言及した。その後、二節で、『多武峰少将物語』中の速度が主人公高光と同質性を持つていることにも指摘した。この四節では、先の論述を踏まえ、『蜻蛉日記』「養女求婚譚」に登場する速度が、物語貴公子と同質性を持つている点について、具体的な物語の場面と比較しながら考察する。

『蜻蛉日記』「養女求婚譚」中の速度が物語貴公子のように描かれているという指摘は、本稿の序文や一節でも紹介した通り、既に多くの指摘がなされてきた。その主な視点は、序文でも紹介した通り、道綱母と速度との間に妖艶な関係を見出し、それを兼家との間に失われたものの代償として捉え、上巻から続く主題が、下巻にも見られるというものである。川名氏(二〇〇〇)が言うように、道綱母は、艶なる場所に自分の身を置くために、速度を風流貴公子のように

描き出したのであり、それは兼家との関係の代償であると守屋氏に同意される。従来指摘される速度の貴公子性は、なぜ速度が物語貴公子足り得る存在として描かれているのかという、道綱母の立場を軸にして展開されるものであった。そのため、具体的な物語作品の場面と『蜻蛉日記』中の速度を比較し、その貴公子性を検証する論はなかった。そこで、『蜻蛉日記』以前の物語作品の数は限られるが、『蜻蛉日記』中の速度を、実際の物語作品場面を踏まえてもう一度見ていきたい。具体的な物語場面と比較することで、『蜻蛉日記』中の速度を持つ貴公子との同質性について詳細に考察していく。その後、速度という人物が何らかのイメージを投影しやすい性質を持つていることを明らかにする。

・筆跡から見る貴公子性

『蜻蛉日記』「養女求婚譚」中の速度が書く手紙は「手もと恥づかしげなりや」とほめられる。このように、筆跡が綺麗で、評価される場面は、他の物語貴公子にも見られる。

以下、二つの場面を取り上げる。

『うつほ物語』

宮あこ君見たまひて、九の君に見せたてまつりたまふに、走り書きたまふさまなどこともなし。(二二六頁)

あて宮の求婚者の一人である良岑行政が、どこに行くにつ

けてもあて宮のことを恋しく思い、手紙を送る。宮あこ君はその手紙を九の君に見せ、筆跡は「こともなし」と評価される。

『落窪物語』

あこぎ、御文を紙燭さして見れば、ただかくのみあり。

君ありと聞くに心をつくばねの見ねど恋しきなき

きをぞする

「をかしの御手や」とひとりごちめたれど、かひなげなる御けしきなれば… (二二五頁)

少将が姫君に向けて送った手紙を帯刀が取り次ぐ。その後、あこぎが手紙を受け取り、紙燭して手紙を見ると、思わず「をかしの御手や」とつぶやいてしまうほどの筆跡があった。

筆跡という観点から、『蜻蛉日記』中の遠度が物語貴公子と同質性を持つていることが見受けられるだろう。

・遠度の佇まい

一節でも紹介したように、「養女求婚譚」の中で、実際に遠度が道綱母の元へ訪れる場面がある。この場面の遠度についての記述は、特に貴公子性が強く、その美しさを物語っている。遠度の佇まいについて、個々の描写を詳しくみてみたい。

ついたち七八日ほどの昼つかた、「右馬頭おはしたり」

と言ふ。「あなかま。ここになしと答へよ。もの言はむとあらむに、まだしきに便なし」など言ふほどに入りて、あらはなる①籬の前に立ちやすらふ。例も②清げなる

人の、③練りそしたる着て、なよよかなる直衣、④太刀ひき佩き、例のごとなれど、赤色の扇、すこし乱れたるをもてまさぐりて、風はやきほどに、⑤纓吹きあげられつつ立てるさま、絵にかきたるやうなり。「⑥清らの人あり」とて… (三二八〜三二九頁)

①籬の前に立ちやすらふ

立ち姿が描写される場面は、『蜻蛉日記』内にもみられる。

『蜻蛉日記』

兵衛佐なめりと思へば、大夫呼びいだして、「いままで聞こえさせざりつるかしこまり、とり重ねてとてなむ、まゐり来たる」と言ひ入れて、木陰に立ちやすらふさま、京おぼえていとをかしかめり。 (二四七頁)

中巻の鳴滝籠りで、道隆が道綱母の元に来訪してくる。道隆が木陰にたたずんでいるその姿は、京を想わせて趣深いと描写される。

『住吉物語』

暗くさへなりたれば、そこはかとも見えず。籬のほどに立ち寄りて、かくなん、

人ならば問はましものを住吉の岸の姫松いく代へ

ぬらん

一人うちながめたまふほどに松風寂しく吹きて、岸の波立ち寄るさま、物思はざらん人だにも心澄みぬべし。まして、中将殿の御心の内あこがれて、この人に尋ね会はずは、世にもあらじとのみ思ひつづけられて、あはれなり。はるかに沖の方より漕ぎ来る船、「荷くさびかけて」など歌ふも、さすがをかしくて、

人知れずあはするかたもなき夢は身のみこがるる
蟹の釣舟

わが思ふ人もなきさに尋ねきて満ちくる潮に身を
や投げまし

とうちながめてぞ、たたずみわづらひたまひける。

(一一四〜一一五頁)

中将が住吉にたどり着き、姫君に恋焦がれる場面である。この場面でも傍線部のように佇まいが描写される。

② 清げなる人 ⑥ 清らの人

傍線部①と同じく、その佇まいが表現されている記述である。この記述は『うつほ物語』に確認することができる。

『うつほ物語』

この木の前には、よろづの木なつかしう、苔を敷き、砂子をまきて、清げなる蔭に立ち寄りて、声づくりたまへば、このうつほの人、琴を弾きやみて、あやしがりて見

たまへば、いと清げなる人立てり。

(八七頁)

兼雅はうつほに至り、子に会って境遇を聞く。うつほを訪れた兼雅の佇まいは「いと清げなる人立てり」と描写され、その立派な姿が顕著に表されている。

物語に登場する貴公子たちは、その佇まいが美しく描写され、それは、速度の記述にも確認することができるものである。筆跡の美しさだけでなく、こういった描写にも、物語貴公子との同質性を見出せる。また、佇まいを描写する物語の場面では、貴公子が女の元へ訪れてきているという場面設定までも一致する。『蜻蛉日記』の場面では、兵衛佐が道綱母を、『住吉物語』では、中将が姫君を、『うつほ物語』では、兼雅が俊蔭女の元に訪れる。この状況の一致は、『蜻蛉日記』「養女求婚譚」中の速度と物語貴公子との同質性が浮き彫りにする。

・速度の装束

速度来訪場面では、佇まいの他に速度の装束に関しても詳細に描写される。その装束描写からも、物語貴公子との同質性を読み取ることができる。

③ 練りそしたる着て、なよよかなる直衣

「練りそす」や「なよよか」などの表現は、同作品内でも見られ、『源氏物語』にも見られる。

『蜻蛉日記』

とばかりありて、「をのこどもはまゐりにたりや」など言ひて、起き出でて、なよやかなる直衣、しをれよいほどなる搔練の桂一襲垂れながら、帯ゆるるかにて、歩み出づるに、人々「御粥」など気色ばむめれば：

(二七三〜二七四頁)

二月、夜が明けて、兼家が起き出してくる場面。この場面の直前に兼家は太納言に昇進しており、その悠然たる姿を描写する。

『源氏物語』 帯木

いでや、上の品と思ふにだにかたげなる世を、と君は思すべし。白き御衣なよやかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもうち捨てて添ひ臥したまへる御灯影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。

(六一頁)

『源氏物語』 須磨

白き綾のなよやかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」と名のりてゆるるかに誦みたまへる、また世に知らず聞こゆ。

(二〇一頁)

どちらも光源氏の美しさを描写する場面である。速度来訪場面と近い表現が見受けられる。

④ 太刀ひき佩き

『源氏物語』 東屋

今朝より参りて、侍所の方にやすらひける人々、今ぞ参りてものなど聞こゆる中に、きよげだちて、なでふことなき人のすさまじき顔したる、直衣着て太刀佩きたるあり。

(四五頁)

二条院に來た中将の君は、ここに何候している少将の君を目にする。この少将の君は純粹な貴公子として造形されてはいないが、太刀を身に付けている描写は『花鳥余情』でも次のように引かれる。『源氏物語』が速度の描写を参考にした可能性があるだろう。

『花鳥余情』

北山抄云外衛佐等任意不帶之至に近衛次将帶劔上殿無妨仍宿侍之時副於宿物持上自余不能持上 蜻蛉日記馬頭はなよらかなるなをしたちはきれいのことなれとあかいのあふぎすこしみたれたるもて

(二三五頁)

⑤ 纓吹きあげられつつ

『狭衣物語』

語らまほしきこと数知らねど、人々近きけはひなれば言少なにて泣く泣く立ちたまひぬるを、あかずのみ思ふ人々多くてせちに見送りきこゆれば、風にうち吹きあかめられたまへる面つきの匂ひは、色々吹きかけられたまふ紅葉の錦よりも匂ひこと見ゆるに、風にした

がひて冠の纓吹きかけられたまへる御鬢のわたり、さし歩みたまへる姿、指貫の裾まで、あまり人の心を乱るべきつまとなりたまへるにも、あまりゆゆしかりけり。

(二一六頁)

狭衣の退出時、女房たちが狭衣を捉える場面。この部分は単に同じような描写というわけではなく、後年、『狭衣物語』が『蜻蛉日記』中の表現を参考とした形跡がある。やはり物語貴公子としての描写と言えらるだろう。

『蜻蛉日記』内の速度の描写と物語作品に登場する貴公子の描写を比較してきたが、その同質性は、個々の表現からも顕著に読み取ることが出来る。『多武峰少将物語』で、速度が、主人公高光と同質性を持つように、『蜻蛉日記』中の速度は、物語貴公子と本文表現のレベルで確かに同質性を持っている。

さらに、兵衛佐や兼家といった同一作品内の貴公子の描写とも比較検討を行った。彼らの立ち姿や装束描写は速度の描写と比較しても非常に似通っており、単に物語作品に登場する貴公子との同質性だけでなく、同一作品内の人物との同質性も確認することができるだろう。この同一作品内の男君との同質性は、『多武峰少将物語』の高光との同質性と構造が似通っている。この点からも、三節でも少し触れたように速度は何らかのイメージを投影させやすい人物で

あったことが読み取れる。『蜻蛉日記』「養女求婚譚」では、『多武峰少将物語』と同様に、速度という人物が大きな役割を担い、作品を彩っていく。

終わりに

『蜻蛉日記』下巻の「養女求婚譚」に関する従来の研究の方向性は、道綱母と速度との間に艶なる関係を見出し、それを兼家との間に失われたものの代償として捉えることで、上巻から続く主題が下巻にも表れているというものであった。これらの論は、主に道綱母と速度という二者の関係性に着目し、論じたものである。それゆえに、速度という人物に対して、詳細に検討がなされたことはなかった。本稿は道綱母と速度の二者間の関係に注目した従来の研究を踏まえつつ、速度という一人物を、別作品である『多武峰少将物語』の速度像も交えて考察した。

『多武峰少将物語』の速度の人物像については、従来、「いやみ」や「才子」といった指摘があった。本稿では、先の二論も踏まえつつ、速度が持つ作中での役割や人物像を主人公との同質性という観点に着目しながら、『蜻蛉日記』中の速度像と論じ合わせることで、「養女求婚譚」を再考察した。『多武峰少将物語』に登場する速度は、物語を大きく動か

すキーマンの性質を持ち、さらに、他人物と同質性を持っていた。高光と師輔という二人の関係性を劇的に接近させ、高光の出家に対する意志を強固にするきっかけを作る速度は、他の登場人物と比べ、異質な存在である。また、高光出家によつて周囲の人間が悲嘆にくれる中、速度は出家願望を述べ、「出家側」の人間として発言する。主人公高光との同質性が非常に意識されている人物像が読み取れる。

この速度像は、『蜻蛉日記』『養女求婚譚』に登場する速度にも確認することができた。『多武峰少将物語』の速度と同じく、『蜻蛉日記』『養女求婚譚』内でも、キーマンとしての役割を担っており、そのうえ、物語貴公子や同作品内の男君との同質性も見受けられる。速度の養女求婚によつて、兼家と道綱母の二者間の関係性が一時的に修復される。さらに、「養女求婚譚」で描写される速度は風流貴公子のように彩られ、その様子は物語作品に登場する主人公格の貴公子と類似していた。また、『蜻蛉日記』内に登場する男君とも同質性を持っており、速度が、何らかのイメージを投影しやすい人物像であったことを指摘した。『蜻蛉日記』『養女求婚譚』の速度は、『多武峰少将物語』の速度と同じように、作中で大きな役割を担い、他人物と同質性を持つ存在であった。速度という人物が重要な存在となつて、『蜻蛉日記』『養女求婚譚』を彩っているのである。

なお、本文引用は、『多武峰少将物語』は『高光集と多武峰少将物語』、『奥義抄』は日本歌学大系所収本、『小右記』は大日本古記録、『花鳥余情』は源氏物語古註釈叢刊 第二巻、その他の散文作品は『新編日本古典文学全集』に拠った。

文献

石坂妙子(一九九七)「世の中」の変容②―速度求婚譚―『平

安期日記文芸の研究』新典社

岡一男(一九五四)『源氏物語の基礎的研究』東京堂

川名淳子(二〇〇〇)「媒介としての『女絵』」『立教大学

日本文学』第五二号) 新典社

川村裕子(一九九八)「速度求婚譚をめぐる」『蜻蛉日

記の表現と和歌』笠間書院

桜井宏徳(二〇二二)「撰関家文壇史の中の『多武峰少将物

語』―九条家の「家の物語」として―」『武蔵野文学』

第六九集) 武蔵野書院

鈴木一雄(一九七六)『なほもあらじ』の意味をめぐる

『かげろふ日記』試解』『金沢国語国文』第五号) 金

沢大学国語国文学会

滝沢美子(二〇一五)『蜻蛉日記』養女求婚記事における道

綱母―仲介者という機能に着目して―(『日本文芸論

叢』東北大学文学部国文学研究室

新田孝子(一九七八)「蜻蛉日記」と『多武峰少将物語』―

速度の人物像をめぐって―『文化』第四一巻三・四号)

東北大学文学会

新田孝子(一九八七)『多武峰少将物語の様式』風間書房

藤井貞和(二〇〇〇)「六条御息所のものけ」『源氏物語論』岩波書店

語論』

松原一義(一九九二)『多武峰少将物語 校本と注解』桜楓社

社

守屋省吾(一九九二)「蜻蛉日記下巻考―速度求婚の経緯を

めぐって―」『論集日記文学 日記文学の方法と展開』

笠間書院

門澤功成(二〇一一)『多武峰少将物語』と師輔周忌法要―

官途不遇を 共有する享受の基盤―」『平安文学の交

響―享受・摂取・翻訳』 勉誠出版

(おおもと・しゅんぺい 令和四年度本学卒業生)